

## 1. 大会全般

### 1) 大会概観

FIFA U20 Women's World Cup は、女子サッカーの世界大会の中で、フル代表に次ぐカテゴリーであり、育成年代から本格的強化年代への発展期と位置づけられる。第6回大会は、当初ウズベキスタンでの開催が予定されていた。しかし、ウズベキスタンの開催辞退により、2012年2月8日に日本開催が正式に決定された。大会には、各大陸予選を突破した16チームが参加し、2012年7月19日から8月9日までの期間で32試合が行われた。16チームが4グループに分かれ予選リーグを行い、グループの上位2チームが決勝トーナメントに進出した。



### 2) 大会結果

ベスト4にはアメリカ・ドイツ・日本・ナイジェリアが、ベスト8には他にメキシコ・朝鮮民主主義人民共和国・韓国・ノルウェーが進出した。決勝には、これまで圧倒的な強さを見せていたドイツと苦しみながら勝ち抜いてきたアメリカの対戦となった。決勝は拮抗した試合となったが、アメリカが勝負強さを発揮し、2大会ぶり3度目の優勝を飾った。日本代表は3位となり、この大会で初のメダルを獲得した。ベスト8にアジアの3か国が進出し、女子サッカーでのアジアの急成長を印象付けた。

また最終日の3位決定戦・決勝には、31,000人を超える観客がスタジアムを埋め、日本での女子サッカーへの関心の高まりを示した。

#### QUARTER-FINALS

Match	Date	Venue	Results
25	30 Aug	Tokyo	Nigeria 1:0 a.e.t.  Mexico
26	30 Aug	Tokyo	Japan 3:1 (3:1)  Korea Republic
27	31 Aug	Saitama	Korea DPR 1:2 a.e.t. (1:1, 0:0)  USA
28	31 Aug	Saitama	Germany 4:0 (3:0)  Norway

#### SEMI-FINALS

Match	Date	Venue	Results
29	04 Sep	Tokyo	Nigeria 0:2 (0:1)  USA
30	04 Sep	Tokyo	Japan 0:3 (0:3)  Germany

#### MATCH FOR THIRD PLACE

Match	Date	Venue	Results
31	08 Sep	Tokyo	Nigeria 1:2 (0:1)  Japan

#### FINAL

Match	Date	Venue	Results
32	08 Sep	Tokyo	USA 1:0 (1:0)  Germany

Team	Played	Won	Draw	Lost	Goals For	Goals Against	Points
Japan	3	2	1	0	10	3	7
Mexico	3	2	0	1	7	4	6
New Zealand	3	1	1	1	4	7	4
Switzerland	3	0	0	3	1	8	0

Team	Played	Won	Draw	Lost	Goals For	Goals Against	Points
Nigeria	3	2	1	0	7	1	7
Korea Republic	3	2	0	1	4	2	6
Brazil	3	0	2	1	2	4	2
Italy	3	0	1	2	1	7	1

Team	Played	Won	Draw	Lost	Goals For	Goals Against	Points
Korea DPR	3	3	0	0	15	3	9
Norway	3	2	0	1	8	6	6
Canada	3	1	0	2	8	4	3
Argentina	3	0	0	3	1	19	0

Team	Played	Won	Draw	Lost	Goals For	Goals Against	Points
Germany	3	3	0	0	8	0	9
USA	3	1	1	1	5	4	4
China PR	3	1	1	1	2	5	4
Ghana	3	0	0	3	0	6	0

### 3) 分析の視点

この大会は、近年フル代表に直結する「大人のフットボール」が体現される場となっている。また各国で次世代を担う選手の基準を評価するうえでも、この大会は意義深い。そこでTSGでは、世界のトップレベルに対する日本の戦いから、世界における日本サッカーの現在地、これまでの育成強化策による成果と現状の課題を抽出した。

加えてTSGでは、コレクティブ・フットボールへと急速に変貌しつつある世界のサッカーを念頭に、2年後の次回大会を見据えた中で、日本選手の「強みと弱み（成果と課題）」を分析し、今後の選手育成について検討した。

## 2. 大会のトレンド

### 1) コレクティブ・フットボール志向の増加

本大会では、多くの国々がU20年代で「コレクティブ・フットボール」に取り組んでいた。前回大会では、上位チームのサッカーの質の向上を取り上げた。しかし本大会では多くのチームが、勝敗に過度に執着しロングボール攻撃や個の能力に依存するのではなく、DFからボールを丁寧に動かし複数の選手が関わる攻撃の組み立てや、チームとして連動する組織的守備に取り組んでいた。

### 2) トップリーダーの継続的成長

本大会では、女子サッカーのトップリーダーであるドイツとアメリカの着実な成長が印象に残った。両国は、コレクティブ・フットボールに必要な「個の能力」を持つ選手がピッチに揃っていた。特に守備面では、チーム全員がコレクティブに関わり続け、高い個の守備能力を基礎とした強固な守備組織を形成していた。

ドイツの洗練された組織的守備からの素早い攻撃は鋭さを増し、DFラインからのビルドアップ能力も向上していた。またドイツには、すでにフル代表に選出されている選手もあり、若年選手の育成が順調に進んでいることを示した。一方アメリカは、インディビジュアル（個人）の成長を重視していたためコレクティブな攻撃には至っていなかったが、優れたフィジカルアビリティを持つ選手と確かなテクニックを備える選手を調和させ、攻守にわたり積極的にアクションするサッカーを展開していた。トップリーダーである両国の着実な成長は、両国が育成年代からサッカーの質をさらに高める取り組みを継続する姿勢を強く感じさせた。

### 3) トップリーダーに続く国々の成長と変化

本大会では、トップリーダーに続く国々が大きく成長しているとともに、その顔触れに変化がみられた。ベスト8の常連であるナイジェリアと朝鮮民主主義人民共和国は、優勝したアメリカと接戦を演じるなど着実に成長を続けていた。初のベスト4に進出した日本は、選手個々の確かなテクニックをベースに、攻撃的なサッカーを展開し大きな成長を印象付けた。また表1, 2に示した得点割合から、決勝トーナメントの得点数と割合は前回ドイツ大会と差はなく、進出チームは変わってもトップリーダーに続く国々の着実な成長が示された。

その一方、前回ベスト4に進出した韓国とメキシコはベスト8にとどまり、前回ベスト8のコロンビアとスウェーデンは大陸予選で敗退し大会への出場権を獲得できなかった。この結果は、U20年代での継続的育成の困難さと同時に、女子サッカーの普及と成長により各大陸での競争が激化していることを示唆した。





表1 U20WWCにおけるステージ別得点と割合

	グループステージ	決勝トーナメント	合計
ロシア大会 2006	85 (80.2%)	21 (19.8%)	106 (100%)
チリ大会 2008	82 (72.6%)	31 (27.4%)	113 (100%)
ドイツ大会 2010	79 (79.8%)	20 (20.2%)	99 (100%)
日本大会 2012	83 (79.8%)	21 (20.2%)	104 (100%)

(データはFIFA Technical report and statistics, 2008, 2010, 2012 より引用)

表2 U20WWCにおけるオープンプレーとセットプレーの得点と割合

	オープンプレー	セットプレー	合計
ロシア大会 2006	84 (79.2%)	22 (20.8%)	106 (100%)
チリ大会 2008	96 (85.0%)	17 (15.0%)	113 (100%)
ドイツ大会 2010	77 (77.8%)	22 (22.5%)	99 (100%)
日本大会 2012	83 (79.8%)	21 (20.2%)	104 (100%)

(データはFIFA Technical report and statistics, 2008, 2010, 2012 より引用)

#### 4) 世界の中でのアジア

アジアの国々に目を向けると、日本・朝鮮民主主義人民共和国・韓国がベスト8に進出し、アジアのレベルの高さを示した。試合内容からも、アジアのレベルが世界の強豪国に確実に接近していることが確認された。

前回大会では、アジアが今後世界で戦っていくためには、「個のプレーの質向上とチームの協働」に加え、「傑出したタレントの発掘と育成」が必要不可欠と分析した。今大会では、コレクティブ（組織）・フットボールを志向した韓国、インディビジュアル（個人）のテクニックを追求した日本は、トップリーダーに主導権を握れずに敗れた。一方、アジアではトップレベルのインディビジュアルをベースに組織を融合した朝鮮民主主義人民共和国が、アメリカをあと一步のところまで追いつめた。これらの結果を考えると、アジアの国々が世界のトップリーダーを打ち破るには、さらに「インディビジュアルの質」を高めるとともに、「コレクティブ・フットボール」に取り組むことが重要であることが示唆された。



[韓国]



[朝鮮民主主義人民共和国]

### 3. 技術・戦術的分析

#### 1) コレクティブ・フットボール

今大会では、攻守にわたりチームが連動し関わりながらプレーする「コレクティブ・フットボール」を志向するチームが拡大した。守備では、中央のブロックをコンパクトに保ち、チームが連動して積極的にボールを奪う組織的守備が整備されていた。また攻撃では、DFラインから複数の選手が関わりながら攻撃をビルドアップし、状況に応じテンポを変える攻撃に取り組んでいた。チーム間に差異はあるものの、コレクティブなプレーを支える「個のプレーの質」も、前回大会からさらに成長していた。

#### 2) コレクティブな守備

##### 状況に応じた状況判断

上位チームでは、相手や味方の状況に応じ、適切なラインコントロールができていた。相手選手だけでなく、重要なスペースをカバーする「スペースマーキング」のできる選手が増え、柔軟かつ強固な組織的守備が上位チームの特徴となっていた。加えて上位チームの守備戦略として、サイドのエリアへの積極的スライドよりもバイタルエリアなど中央に強固な守備ブロックを形成することを優先する傾向がみられた。

また暑熱下での試合の多かった本大会では、前線からのハイプレッシングを行う場面は少なく、攻守の切り替えを早くし、守備組織を形成したうえでボールを奪いに行く場面が多くみられた。守備ブロックを形成後は、積極的アプローチとカバーを繰り返すことで相手のプレーを限定し、意図的に相手を誘導してボールを奪うチャンスを作り出していた。

このように世界のトップレベルでは、選手個人が「プレーの原則」をしっかりと理解し、状況に応じて守備のアクションを判断できること、そして個のアクションに呼応し、チームが連動してゴールを守りボールを奪えることが必要不可欠となっていた。

##### 個人でボールを奪いきる能力、攻撃に転じる能力

本大会では、「ボールを失ったらすぐに奪い返す」意識が高く、球際での競り合いは非常に激しいものであった。球際では、激しく身体をぶつけ合い、奪うチャンスを逃さず、深いタックルやスライディングでボールを奪いきる能力を持つ選手が増えていた。また上位チームの選手は、激しい守備でボールを奪った直後、すぐに攻撃に転じる能力を併せ持っていた。そして複数の選手がボール奪取後に攻撃に転じ、コレクティブなファストブレイクを実践していた。コレクティブな守備を実現する「個の力でボールを奪いきる能力」とともに、「ボール奪取後すぐに攻撃に転じる能力」が、トップレベルでは重要になっていた。

##### クロスに対する守備

本大会では、中央に強固な守備組織を形成するチームが多かったため、サイドアタックを選択する場面が多くみられた。そのため、クロスボールからのゴール前の攻防が、勝敗を左右する要因となっていた。アメリカやドイツには、相手のクロスに対して、正しいポジションから相手と競り合いながらクロスを跳ね返すことのできる選手が多く存在した。コレクティブな守備が進み、さらに中央突破が困難となることが予測される中、クロスに対する守備の重要性は今後ますます高まるであろう。



### 3) コレクティブで多様な攻撃

#### ビルドアップからの攻撃とサイドアタックの有効性

本大会では、多くのチームがビルドアップをベースにした攻撃を志向していた。上位チームでは、選手個々のテクニックが高まり、ビルドアップの中でのオフザボールでの関係づくりや、アクションのタイミングの質が向上していた。未だ状況判断やテクニックのミスによりボールを失う場面が散見されたが、複数の選手が積極的に攻撃に関わろうとする意識が高まっていた。

また本大会では、ビルドアップからサイドを突破するシーンが多くみられた。この攻撃では、ビルドアップの中でサイドバックがタイミングよく長い距離を走ることにより、サイドで数的優位を作り効果的な突破を可能にしていた。有効なサイドアタックが増えクロスの質が高まることで、ゴール前に飛び込む選手の動きの質が重要となっていた。上位チームでは、精度の高いクロスボールから、ゴール前の質の高いアクションからゴールを奪う場面が多くみられた。

#### コレクティブな守備に対する打開策

ドイツやアメリカは、コレクティブな守備から意図的な速攻を大きな武器としていた。コレクティブな守備を実践するチームが増えた中、「ファストブレイク」がゴールを奪う効果的手段であることは間違いない。しかし今大会は、ボールを失った直後、まずその場所に近い選手がファストブレイクを遅らせ、その間に素早く守備組織を形成するチームが多くみられた。そのため、守備ブロックを形成したコレクティブな守備を突破するためには、ビルドアップから作り出した相手の隙を見逃さずに突破を図る攻撃の必要性が高まっていた。

上位チームでは、ビルドアップから複数の選手が関わり、相手を意図的に動かし攻略するコレクティブな攻撃を企図していた。しかし、状況判断やテクニックの未熟さにより、効果的攻撃に至らない場面が多くみられた。コレクティブな攻撃に必要な個のプレーの質を高めていくことが、今後この年代の重要な課題となる。

#### 脅威となるセットプレー

本大会の特徴として、セットプレーの攻防の重要性が増したことが挙げられる。キックの質が大きく向上し、セットプレーから多様な得点デザインが可能となっていた。直接ゴールを狙えるシュートレンジが長くなる一方、精度の高いキックからピンポイントで味方に合わせるセットプレーは相手の脅威となっていた。

コレクティブな守備が広がる中、セットプレーの重要性は今後ますます高まることが予測される。そのため、トップレベルの戦いでは、攻守にわたるセットプレーへの取り組みが非常に重要な要素となっていくであろう。

### 4) 決定的なプレーのできる “傑出した個”

攻守にわたりコレクティブ・フットボールを志向するチームが増える中、本大会では以前の大会に比べ傑出した個の存在が目立つ場面が少なくなっていた。その一方で、ゲームの中で勝敗を決したのは、一瞬で「相手を突破するプレー」や「相手を抑え込むプレー」のできる選手の存在であったことも事実である。優勝したアメリカには守備の要の Julie JOHNSTON、ドイツにはすでにフル代表に選ばれている大会 MVP の Dzsennifer MAROZSAN や Lena LOTZEN の両 FW、3 位日本では柴田華絵、アジアでは朝鮮民主主義人民共和国の KIM Un Hwa や韓国の JEOUN Eunha が傑出した質のプレーでチームを勝利に導いている。彼女たちは、チームプレーの中で機能しながら、個の力で相手を打ち破ることのできる傑出した選手であった。

コレクティブ・フットボールが主流となる現在のサッカーでは、チームとしてコレクティブに協働できることが必要不可欠となっている。しかし、組織としてのサッカーの機能性が高まれば高まるほど、その組織を打ち破るために「チームワークの中で活きる傑出した個の存在」が重要となっていくであろう。





## 4. 日本の現在地

グループステージで敗退した前回大会における日本の課題として、「プレーの原則に基づく状況判断」、「動きながらのプレーの質」、「DFからのビルドアップ能力」、「ショルダー・ショルダー」、「ゴール前の攻防」、「責任を持って伝えきるコミュニケーション能力」、「ピンチとチャンスを感じる感性」、「責任とリスクを理解した自己主張」が挙げられた。

今回の日本は、積極的な攻撃サッカーで3位へと躍進した。日本のテクニカルな攻撃サッカーは、FIFA関係者からも高い評価を受けた。その一方、ドイツとの戦いでは、トップレベルと戦う中で日本選手の改善すべき課題が顕在化した。ここからは、本大会でみられた「日本の強みと弱み（成果と課題）」、加えて「課題改善の方向性」について考えてい。



### 1) 強み（成果）

#### **個のテクニックを活かした攻撃**

日本は個のテクニックを活かし、前回大会に比べDFからのビルドアップ能力を大きく向上させた。選手は、安定したビルドアップをベースに、積極的にゴールを目指すプレーにトライしていた。またプレッシャーがそれほど厳しくない状況では、動きながらのプレーの質が向上した。日本選手は、狭いエリアでも確かなテクニックでボールを運び、身体をうまく使ったターンや相手の逆を突くコントロールで相手を突破する場面が多くみられた。加えてアタッキングサードでは、シュートへの意識も高く、ペナルティエリア付近から積極的にミドルシュートを放ち、ゴールにも結び付けていた。

オンザボール（オン）とオフザボール（オフ）の両局面で、相手を観ながらゴールへ向かい積極的に仕掛けようとするプレーは、日本の大きな武器となっていた。

#### **サイドを起点にした攻撃**

日本は、広がりを持ったビルドアップの中から、素早いパスワークによりサイドで数的同数あるいは数的優位の状況を作り出し、積極的に仕掛けることでチャンスを作り出していた。またサイドバックが、長い距離を走る高いモビリティの中からタイミングよくアクションを起こすなど、サイドを起点に相手の守備ブロックを効果的に攻略する場面もみられた。

#### **スライディングによるボール奪取**

リーチが長くプレーエリアの広い欧米選手に対して、日本選手は深いスライディングでボールを奪う場面が多くみられた。欧米選手に比べ体格の小さな選手の多い日本にとって、スライディングはボールを奪い取るために必要不可欠なテクニックである。そのため、スライディングによるボール奪取テクニックには、今後も継続的に取り組んでいくことが望まれる。



## 2) 弱み（課題）

### 個のテクニックの質

日本は、テンポの良い攻撃で多くのチャンスを作り出した。しかし、コントロールやキックの質がもう少し高ければ、シュートや決定的チャンスにつながっていたと考えられる場面も多くみられた。「止めて蹴る」といったシンプルなテクニックに加え、動きながらのテクニックの質をさらに高めていくこと継続的課題となろう。

またドイツやアメリカに比較した場合、ロングフィードの距離と質の向上が日本の大きな課題であった。相手が前がかりにプレッシングをかけている状況で、オフザボールの間に味方選手と関係を作り、相手 DF の背後や逆サイドへの正確なロングフィードを送ることは、相手のプレッシングを無力化し、突破のチャンスを作り出す有効な攻撃の選択肢となる。物理的なキックの距離と正確性の増大に加え、状況に応じたロングキック選択の判断能力の向上も、日本選手の大きな課題であった。

### 関わりの中でのテクニック発揮

本大会の日本は、個で仕掛けるプレーが顕著に向上した一方、複数の選択肢を作り出す関わりという面では課題を残した。強固な守備組織を突破するためには、複数の選択肢を持った中でタイミングよく仕掛けていくことが重要となる。例えば、パスの選択肢を持った中でのドリブル、背後をうかがいながら下がってボールを引き出すプレーなど、相手に意図を読ませず賢く駆け引きすることが、相手を惑わすために必要となる。

オフの選手は、タイミングよく相手の嫌がるスペースへ動き出すサポートを増やし、ボールを持つ選手に複数の選択肢を提供することが重要となる。またオンの選手には、ボールに寄りボールをコントロールする場所を工夫することで、関わる選手を活かしながら仕掛けることが可能となる。

特にドイツ戦でみられたように、身体能力とテクニックに優れた選手がコレクティブな守備を実践してきた場合、プレーの選択肢が一つしかない個の仕掛けでは、相手を突破することは困難となる。厳しいプレッシングを受ける中でも、素早い判断から味方選手との関わりの中で複数の選択肢を作り、オンでもオフでも積極的に仕掛けていくことが日本の課題として示された。

### 状況に応じた瞬時の予測と準備

日本選手は、グループリーグなど主導権を握る試合では、状況に応じた判断と準備に基づく守備ができていた。しかしドイツ戦など、考える時間と余裕の持てない状況では、状況に応じた適切な判断と準備ができていなかった。ボールウォッチャーになり相手を見失う、相手選手に不用意に食いついてしまい危険なスペースを空けてしまっていた。つまり、いまボールを奪える状況か、あるいはゴールを守るべき状況かという、守備局面で非常に重要な判断が適切にできていなかった。

特にドイツ戦の失点にみられたように、ボール状況が急に不利になった場合には、ディレイやカバーなどゴールを守るためのプレーの原則に基づき適切な判断が求められる。いかなる状況でも、瞬時に適切な判断と準備をすることが日本選手の大きな課題として挙げられた。

### クロスに対する守備

キックの精度が向上したクロスボールからの攻撃は、得点の大きなチャンスとなっている。そのため、特に身長とパワーで劣勢に立たされることの多い日本選手では、クロスに対する守備の改善は必要不可欠な課題となる。

ドイツ戦では、コーナーキックからのクロスボールに対応できず失点を喫している。パワーと体格に勝る相手に競り勝てることは理想である。しかし、相手に自由にヘディングさせないコンタクトプレーにも取り組む必要がある。またヘディングの競り合いだけでなく、様々な弾道とタイミングでキックされるクロスボールに対し、マークする選手を視野にとどめながら、先にボールをクリアできるポジショニング能力の獲得と球際で競り負けない、そして競り勝てる能力を獲得することに取り組むことが重要である。

### コンタクトプレー

前回大会では、「ショルダー・ショルダー」との表現を用い、球際ではフェアに激しくボールを奪いきる、ルーズボールに競り勝てる能力の向上を課題として挙げた。本大会では、スライディング能力の向上は認められたものの、未だ球際での競り合いが日本の改善すべき課題であった。

日本選手の多くは、身体を相手との間に入れることでボールを奪う、あるいはキープしようとする傾向に

ある。しかし、世界のトップレベルでは、身体を入れるだけでなく、球際では身体を強くぶつけることで相手のバランスを崩しながら自身のプレーエリアとボールを確保する能力が高い。

体格とパワーに劣る日本選手は、パワーで相手に対抗するだけでなく、自らの強みである俊敏性を最大限に活かすことで、全身を使って相手の懐に飛び込み、深く鋭くそして力強いコンタクトプレーを意識することが必要となろう。そのためには、様々な動きに対し、意のままに身体を操れるコーディネーション能力の獲得が必要とある。また何よりも、接触プレーを厭わず、恐れることなく身体をぶつけ合える意識とトレーニング環境が必要不可欠となろう。

### **スローイン**

本大会でも、日本はスローインから安易にボールを失う場面が多くみられた。手でボールを扱える利点と相手の強いプレッシングを受けやすい状況を勘案して、スローインからのプレーを改善することが必要である。

### **「プレーの原則」の理解**

ここまで、技術・戦術的な課題について述べてきた。ボールを巧みに扱う技術、身体を自在に操るフィジカル能力が重要なことは自明である。しかし、それらのテクニックの源泉は、適切な状況判断にある。選手はトレーニングやゲームの中で、感覚的に様々な判断基準を身に付けていく。しかし、感覚的に得た判断基準を、論理的に整理し多様な状況に活用できる判断基準に高めることが重要となる。そのため、攻守にわたる「プレーの原則と優先順位」を正しく理解することが、選手には非常に重要となる。

自分自身で状況を観て的確に判断できる能力、チーム戦術にとどまらない状況に応じた判断能力の開発は、日本が世界のトップレベルでさらに飛躍していくためには必要不可欠な要素となる。そのため、プレーの原則やプレーの優先順位を、育成年代では徹底して選手に問いかけ、常に考えさせることが必要となろう。

### **自立した選手**

ドイツ戦では、開始 19 分の中に立て続けに 3 失点を喫して試合の主導権を相手に渡してしまった。外から見ていても、失点直後の彼女たちの動揺は明らかであった。後半の戦いを観ると、3 点リードした相手が無理をしなくなったということを示し引いても、日本の選手たちの積極的なプレーは、幾度となくドイツを苦しめていた。失点直後、選手たちが自ら状況を分析し相手への対抗策を自ら導き出せていたら、またそれをピッチレベルの選手たち自身で共有できていたら、試合の展開は大きく変わっていたであろう。

想定していない苦しい状況に直面した時、限られた時間で状況を的確に分析し、自ら状況を打開する意識と勇気を持つ選手、そうした自立した選手の育成が今後の大きな課題と考えられる。

本大会において、ヤングなでしこの選手たちが表現したサッカーは、日本女子サッカーの大いなる可能性とともに、今後取り組むべき課題を示してくれた。日本開催により、多くの方々が彼女たちのプレーとともに、この年代における世界のトップレベルのプレーを観る機会を得られた。我々には、本大会で顕在化した日本選手の大いなる可能性と改善すべき課題を共有し、「Japan's Way」を体現できるよう継続的に取り組んでいくことが求められよう。

